

地学フォト巡検記

奈良県曾爾村の屏風岩

吉田 史郎¹⁾

世は自然写真ブーム

最近、世はちょっとした自然写真ブームである。有名な観光地や撮影地に出かけた時に、あちこちで三脚にカメラをすえてしきりにシャッターを押しているカメラマンを目にした方も多いと思う。最近の自然保護や自然回帰への動き、バブル経済崩壊や高齢化社会の心の癒しと言ったいろんな要因が、こういった自然写真ブームの背景にあると思う。

自然界を被写体とする写真、つまり自然写真はネイチャーフォトとか風景写真とも言うのだが、私もそういった写真はみるのも撮るのも大好きである。いろんな美しい自然を切り撮った写真を鑑賞していると、多種多様な景観、自然現象、動植物が被写体となっていることに驚く。その中にはもちろん、地学に関係する被写体もある。

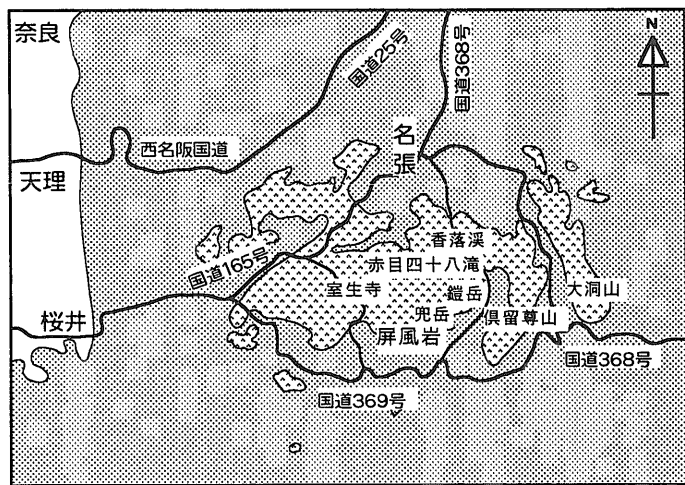
これから今回を第一回目として、写真の被写体としての地学の題材を取り上げ、その題材を地学的

な観点から解説するフォトエッセイ風記事を連載したいと思う。自然写真の被写体となるような題材の場合は、その作品づくりについても解説したい。題材は地層や岩石だけでなく、動物でも植物でも地形でも、それが地学にかかわるものならなんでも取り上げて行くつもりだ。

屏風岩にはヤマザクラ

さて第一回目の題材として、曾爾村の屏風岩を取り上げる。曾爾村は奈良県と三重県との県境にある村で、近畿地方のど真ん中にある(第1図)。だから車でなら、大阪方面からでも、名古屋方面からでも、日帰りで十分いける距離にある。

関西の風景写真ファンのあいだで曾爾村といえば、スキの曾爾高原が有名である。また近くには、溪流と滝の撮影地としてこれも良く知られた赤目四十八滝がある。屏風岩はそういった撮影地ほ



室生火山岩

第1図
室生火山岩の分布範囲と周辺の交通網。

1) 地質調査所 大阪地域地質センター

キーワード: 奈良県, 曾爾村, 屏風岩, 室生火山岩, 溶結凝灰岩

どポピュラーでないが、四月のヤマザクラのシーズンは素晴らしく美しい。

アクセスには車が便利

屏風岩方面へは名張からの路線バスがあるが、本数も少ないし、時間もかかる。その上、停留所から現地までは、急な坂をかなりの距離歩くことになるから、重い撮影機材をかついでのアクセスはしんどい。だから車で行くのが至便である。

車で大阪方面からでかけるなら、西名阪国道の針インターで降りて南下し、室生寺をめざすのが便利だ。桜井方面から国道165、369号線を利用するのもよい。名古屋方面からなら、東名阪国道から国道25号線に乗り継ぎ、名張街道(国道368号線)を南下して名張をこえ、青蓮寺川に沿って香落溪を抜けるのが近道だ。どちらの方面から行っても、サクラの季節は室生寺近辺や香落溪の景観も素晴らしく、つい車を止めて撮影したくなる。が、ここはグッと我慢して屏風岩をめざそう。

曾爾村の集落を走る頃になると、青蓮寺川の北側に連なる断崖が目に入り出す。屏風岩の麓にやってくると、標識があるので道に迷うようなことはない。標識にしたがって坂道を登坂すると、やがてそそり立つ岩壁を指呼の間に望むようになる。最後の急な坂道を登りきると、ようやく駐車場だ。

車を降りると、目の前に高さ50mはありそうな絶壁がそそり立ち、ヤマザクラも咲いていて実に美しい。ここでも写欲は十分わくが、肝心の撮影ポイン

トでの時間がなくなるので我慢して、崖沿いの小道を西に進もう。すると表紙の写真を撮影した広場にやってくる。ここが屏風岩の撮影ポイントだ。

1450万年前の火砕流-室生火山岩

さて眼前の断崖は室生火山岩という岩石でできている。この高さ50mに近い断崖は、およそ2kmにわたって文字通り屏風のように続いている。同じような断崖は、青蓮寺川の北に点々とあり、形に特徴のある岩体には、兜岳(写真1)とか鎧岳(写真2)とかいった愛称がつけられている。実は、屏風岩を含むこれらの岩体は、昭和9年、国の天然記念物に指定されているのだ。

室生火山岩は、東西30km、南北15kmに広がる火山岩で(第1図)、一番厚いところでは400mもある。ところで、兜岳、鎧岳、倶留尊山、大洞山(第1図)などは、山の輪郭が似ているのでよく火山に間違えられるが、もちろん火山ではない。あとで説明するが、今私たちが目にしていく景観は、屏風岩や赤目四十八滝もぜんぶ、溶岩に似た火砕流というものが積み重なってできた平らな台地が、1,500万年近くもかかって侵食されてできた地形なのだ。

ここでチョット、室生火山岩の研究の歴史をたどってみよう。

室生火山岩が初めて研究されたのは、今から60年も前の昭和の初め1930年代で、その時にはドロドロのマグマが陸に流れて固まった溶岩と考えられた。また、石の種類も石英安山岩に分類された。

ところが詳しい研究が1960年代になって進むと、これは溶結凝灰岩であって、種類も石英安山岩よりも酸性成分の多い流紋岩であることが分かった。

溶結凝灰岩とはあまりなじみのない言葉だが、簡単に説明すると、火口から噴出した火山ガラスや細かい岩片が入り混じった高温の火砕物質が、高温と自重のため、水飴のようにドロドロになって流動し、やがて冷えて固まってできた岩石を溶結凝灰岩と呼んでいる。肉眼ではなかなか普通の凝灰岩と区別しにくいのだが、溶結凝灰岩の岩石薄片を作って偏光顕微鏡で観察すると、火山ガラ

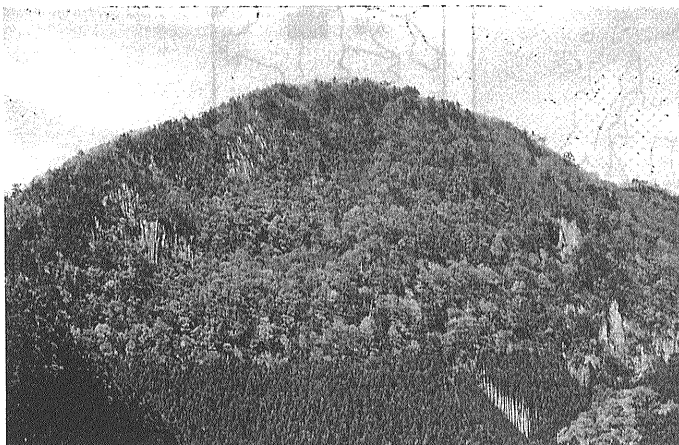


写真1 兜岳を望む。

スが流動しているのがすぐ分かる。

屏風岩や鎧岳の写真を見ると、岩壁に電柱が何本も並んだような構造がみられる。これは、溶結凝灰岩が冷えて固まったときにできた節理なのだ。地質学では、このような形の節理を柱状節理と呼んでいる。

溶結凝灰岩は、陸上の火口から吹き出した火砕流によってできることが多い。火砕流という用語も昔はなじみが薄かったが、ごく最近雲仙普賢岳が噴火した際、しきりに火砕流という言葉が使われ、また実物がビデオに撮られ、何回もテレビ放映されたりしたから、みなさんもお存じだと思う。

ところで、室生火山岩を作った火砕流は、いったいつごろ陸に噴出したのだろうか？ 面白いことに、研究が始まったころには、そんなに古くはなく、せいぜい数100万年前の鮮新世だっただろうと考えられた。ところが最近、詳しい放射年代が測られ、中新世の1450万年前頃に噴出したことが分かった。

この室生火砕流がどこから流れてきたのか、まだハッキリしないようだ。ただここより南の紀伊半島には、熊野酸性岩や大峰酸性岩という数10kmもある大きな半深成岩体があることが、昔から研究者の注意を引いてきた。というのは、大峰岩体の北端と室生火山岩の南端は20kmしか離れていないのだ。

最近、熊野酸性岩の年代が測定されたが、酸性岩体と室生火山岩ができた年代にはほとんど差がないことが分かった。おまけに岩質も似ているので、これらの酸性岩体と室生火山岩の成り立ちには、何か関係がありそうだと考えられている。

もしこの考えが正しいとすると、1,450万年前頃に、近畿地方南部を覆いつくすような、とてつもない規模の火山活動があったことになる。もちろん雲仙普賢岳の時とは比べものにならないほどの規模だったわけで、それだけの規模の火砕流が、爆発的に近畿地方南部を覆ったとすると、あたりの生き物はすべて死滅しただろう。

ここまで書いてフッと気がついたが、紀伊半島潮岬の付け根に、橋杭岩の名で知られる石英斑岩の岩脈があることをお存じだろうか。写真愛好家のあいだでは、この橋杭岩もまた有名な被写体だ。夜

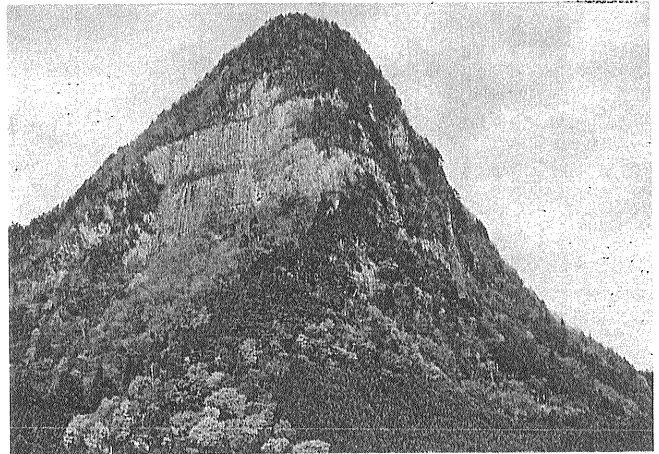


写真2 鎧岳を望む。

明けのころ、逆光に浮かぶ橋杭岩のシルエットのあいだを朝日が昇る写真を目にした方も多いと思う。

橋杭岩も、実はこの酸性岩体の一部なのだ。そうだとすると、お互いに120kmも離れている橋杭岩と室生火山岩がおなじ火山活動でできた親戚かもしれないことになる。研究が進むと、それまで無関係と思われていたものを結びつけて理解できるようになる。なんとなく学問のロマンを感じるのだが、どうだろうか。

撮影のポイント

屏風岩にはヤマザクラがよく似合う。ヤマザクラが満開になるのは四月中旬から下旬だが、実際には京都近辺のソメイヨシノが満開になった一週間から十日ほど後に出かければ良いだろう。ただ、年によってピークが多少ずれるから、慎重を期して地元役場に問い合わせるだけの用心はしたい。

作品づくりには、サクラと屏風岩をどうフレーミングするかがポイントである。ここで撮影された作品のほとんどは、口絵8ページの1のようにサクラが主題となっており、屏風岩は添え物程度に扱われているようだ。しかし、それならわざわざ屏風岩までやってきた甲斐がない。そう考えて、表紙の写真のように屏風岩を主役に、ヤマザクラを脇役にした作品も撮影した。どちらにしても、屏風岩とサクラを一枚の画面の中にどうバランスよくまとめるかが、作品の良し悪しを決めることになる。

35mm一眼レフなら、使用レンズは28-70mm、

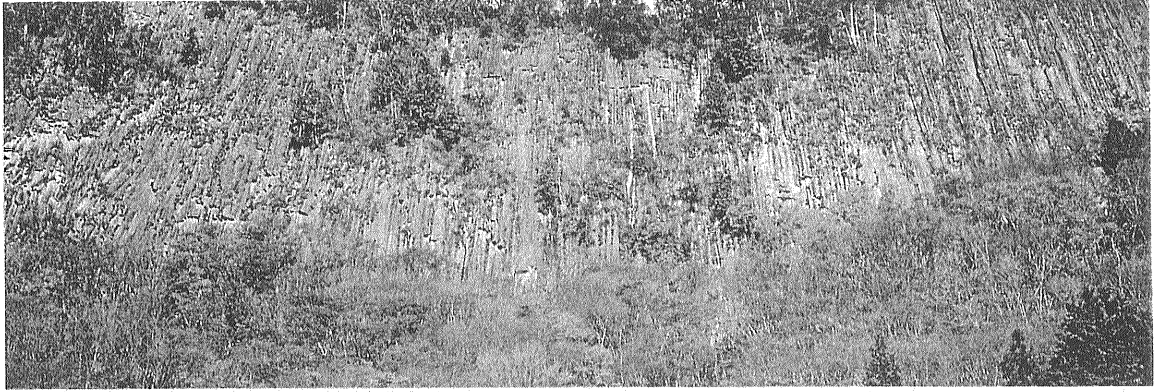


写真3 モミジに彩られる屏風岩。

28-105mmクラスの標準ズームで十分だ。広角で屏風岩とサクラの全景をとる場合でも、28mmぐらいの画角が限界だろう。それ以上の超広角での撮影には、アオリ機構のついた大中判カメラや特別なレンズが必要だ。というのも、超広角になると仰角が大きいため、岩壁が上すぼまりの構図になってしまい、作品に強さがなくなってしまうからだ。ちなみに、表紙の写真は28-70mmの標準ズームを使用して撮影している。

望遠レンズを使っただけで、部分部分の切り撮りも面白い。その場合、岩壁のあちこちに咲く赤いミツバツツジもバランス良く取り入れたい。なお、いずれの場合も三脚とPLフィルターは必携である。

良い作品をつくらうと思うなら、天候と光の状態を見きわめることが大切だ。私が出かけたときは、運良く(?)快晴で、空に力があつたので、表紙のように青空を取り入れた作品も撮影した。だが本当は、雨まじりの天気の方がサクラや岩肌に質感がでて、風情のある作品になったと思う。その場合、空を入れない方が作品に力強さがでることに注意したい。

注意したいのは撮影時間である。曇りや雨の日はともかく、晴れた日には撮影する時間帯がポイントになる。地図をみると屏風岩、兜岩、鎧岩はいずれも南向きで、日影には入らないようにみえるので、いつ来てもよさそうにみえるが実はそうではない。

兜岩や鎧岩は、午後になると日陰に入り、撮影が難しくなる。だから兜岩や鎧岩も撮影するつもりなら、午前中に兜岩と鎧岩をねらい、午後に屏風岩

を撮影する方が良い。もちろん風景写真としての作品づくりをねらうなら、昼間のトップライトより、夕方のサイド光のほうが作品に立体感がでて良い結果が得られることは言うまでもない(口絵8ページの2)。

一度はチャレンジを

屏風岩は春のヤマザクラだけではなく、秋のモミジとの組み合わせも美しい(写真3)。春や秋の撮影シーズンには、すぐ近場に、室生寺、曾爾高原、赤目四十八滝、香落溪など、風景写真の撮影ポイントにはことかかない。これらの撮影地と組み合わせ、写真撮影に一日を過ごすのも良いだろう。

ただこういった有名な撮影地は、シーズンの休日ともなると、車、観光客、ハイカーに加え、三脚をかついだカメラマンで繁華街なみの混雑となるのがネックである。その点、今回紹介した屏風岩は、交通の便があまりよくないせいか、他の撮影地に比べ、カメラマンやハイカーの姿も少ない。それだけに、じっくりと作品づくりに専念できる撮影ポイントとして、おすすめしたい。

室生火山岩の記述には、飯塚保五郎氏、君塚康次郎氏、志井田 功氏、宇都浩三氏、角井朝昭氏、山元孝広氏による論文を参考にしたことを付記する。

YOSHIDA Fumio (2000) : Byobuiwa in Soni Village, Nara Prefecture - Photoessay on geoscience.

<受付: 1999年8月16日>